

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23500887

研究課題名(和文)在宅認知症高齢者とその家族を対象とした介護援助プログラムの開発に関する研究

研究課題名(英文) A study on Development of the care support program for dementia elder patients at home and their caregivers.

研究代表者

篠田 美紀 (Shinoda, Miki)

大阪市立大学・生活科学研究科・准教授

研究者番号：10285299

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：認知症高齢者への効果的な援助と介護家族への介護支援を並行して行う、包括的介護支援プログラムについて、在宅軽度アルツハイマー型認知症高齢者とその介護家族双方を対象に研究を行った。グループ回想法による認知症高齢者本人への援助プログラムでは、精神的エネルギーの向上や孤独感の改善が認められ、同じくグループ形式で行った介護家族への介護援助プログラムでは、心理・社会的アプローチとピアカウンセリングを折衷した柔軟なプログラムが望まれた。また、このような並行包括的介護支援プログラムには少なくとも6か月の期間を必要とし、その後もネットワーク維持のため、継続的なサポートの必要性が明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop the care support program for dementia patients at home for their caregivers. Both reminiscence group therapy for dementia patients who are diagnosed with light Alzheimer-type dementia and group sessions of caregivers are held side by side at the same time.

As the result of Reminiscence group therapy, we got three signs in their Baum test that showed improvements of the feeling of loneliness, and the increase of mental energy. It clarified Reminiscence group therapy is useful for supporting dementia patients. Caregivers need information about these points. 1) How should they choose which doctor to see the family doctor or a dementia specialist. 2) Someday patients will be lost the ability to write. This will cause many troubles at bank. 3) They want to understand how dementia will progress in the future. 4) Caregivers forget how to care for themselves. A better program is needed combining all of the existing programs and peer support programs.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学 生活科学一般

キーワード：認知症 介護家族 回想法

1. 研究開始当初の背景

これまで、認知症高齢者のケアに関する研究報告は、病院や特別養護老人ホームなどの高齢者施設内での実践的研究が多かったが、近年 認知症の早期診断が可能となり、認知症高齢者数が増加するにつれ、在宅認知症高齢者のケアに関する研究が急務となった。さらに、その介護を担い、認知症高齢者の在宅生活を支えている、介護家族を支援するための実践研究が必須であろう。しかしながら、これまでの研究報告では、症状を有する高齢者本人と介護者である家族への援助が別々に検討されてきたために、在宅の認知症高齢者のケアについて、包括的な実践の方向性が見失われがちであった。特に診断から時間経過の少ない軽度レベルの認知症高齢者の場合、在宅生活を営むケースがほとんどである。症状の発現による高齢者本人の精神的不安定さに加え、診断の受容や今後の病状の進行、在宅生活継続への不安に圧倒される家族も少なくない。欧米の高齢者臨床においては、認知症高齢者と家族や介護者双方を援助する試みが既に始まっており（例えば、Bob.Woods 他 Joint reminiscence groups for people with dementia and their family care-givers:a randomized controlled trial platform, Selected Conference Papers and Proceedings pp.126-130, International Reminiscence and life review Conference 2007）認知症高齢者本人の自伝的記憶の回復と、家族及び介護者のうつ傾向の回復に顕著な効果が認められている。そこで、今後の在宅介護支援において、高齢者本人と介護家族双方への包括的な介護プログラムの開発が急務であると考えられた。

2. 研究の目的

本研究では、認知症の診断早期にある在宅軽度認知症高齢者とその介護を担う家族双方を対象として臨床心理学的援助を実施し、1)認知症診断後、早期の認知症高齢者本人と、その家族双方に対する効果的な援助プログラムの開発とその効果検証、および、2)介護家族のネットワーク形成のためのプログラム開発とその効果検証の2点を目的とした取り組みを行った。診断早期にあり、抑うつ傾向を示して自宅に引きこもりがちになる高齢者本人の病態の改善と、その介護を引き受けざるを得なくなる家族の孤立を予防し、介護のセーフティネットとして機能するプログラム開発を目指す。具体的には、近年、認知症高齢者への心理的効果が報告されているグループ回想法による手法と、病院など各施設で家族を対象に実施されている認知症理解のための心理・教育プログラムおよび、心理的サポートとしての家族グループによるピアカウンセリングを効果的に組み合わせた認知症高齢者本人とその家族の並行介護支援プログラムの作

成を目的とする。

3. 研究の方法

(1) 認知症高齢者を対象としたグループ回想法の実施

認知症高齢者本人を対象に、心理的援助を目的としたグループ回想法を行なった。1グループ 5 人以下のグループにリーダー 1 名、コリーダー 2 名を配置したメンバー固定のグループ形式で、週 1 回 10 回連続で施行した。(実施期間 10 週 2 か月半)。会の名を「懐かしの会」と称して、思い出を語る会と説明し、主治医からの紹介で本人及び家族の同意を得て実施した。

グループ回想法の効果評価には、グループ参加前と参加後に認知機能評価スケール (HDS-R、MMSE) と適応状況を評価する投影法 (バウムテスト、Rorschach Test) による評価を行った

(2) 介護家族を対象とした家族会

認知症高齢者を対象としたグループ回想法と並行して、研究代表者がファシリテーターとなり、付添家族による家族会を行った。当初は、家族会の構成もメンバー固定のグループ形式を予定していたが、毎週 1 回の付添は、家族にとって負担が重く、また、付添家族もまた高齢者であるため、介護家族のグループはメンバー固定ではなく、様々な立場の介護者が参加できる様式に変更した。この結果、付添家族の会は、配偶者や娘・息子・嫁の立場以外にも、日頃は遠方にいる娘・息子、在宅介護者の兄弟姉妹・高齢者本人の兄弟姉妹・甥や姪、など、様々な立場の家族が参加し、介護保険手続き後には、介護ヘルパーやケアマネージャーの立場からの参加もあった。

家族会の評価は 会の中で、家族会への要望と満足に関する発言とアンケートを質的に分析した。

グループ回想法と家族の会は H23 年 9 月より H26 年 3 月まで H23 年度 2 グループ、H24 年度 3 グループ、H25 年度 3 グループ、計 8 グループ行った。それぞれ対象とした人数を表 1 に挙げる。

表 1 グループ回想法と家族会出席人数

年度	グループ	回想法	家族会	総計 (名)
H23	2	8	8	16
H24	3	18	17	35
H25	3	15	15	30
合計	8	42	41	83

(重複参加があるため、延べ人数)

(3) プログラムへの継続率と参加率

本プログラムへの参加を決定した、エントリー数は 53 家族であった。しかし、後に何らかの事情でプログラムへの参加を中断した事例は 13 事例あり、本プログラムへの参加継続率は 75.5%であった。

また、1グループ10セッションの修了後、次グループへの参加を継続して希望する家族が多く、1家族1回のみグループの継続を認めたとこ、82.4%の家族が継続を希望し、2グループ引き続きの参加となった。継続ケースについてはグループへの参加率は極めて高く、どのグループにおいても、70%以上の出席率を得た。

4. 研究成果

(1)【認知症高齢者グループ回想法の効果】グループ回想法に参加した38名(男性13名、女性25名、最高年齢88歳、最低年齢60歳、M=75.9±6.04歳、HDS-R 18.9±4.45点、MMSE 21.3±4.1)を対象に、グループへの参加前と参加後の認知機能と適応について比較を行った。認知機能評価については、参加前と参加後には有意な差は認められなかった。適応評価はバウムテスト(樹木画法)を用い、各指標について判定したところ、参加前と参加後で以下の3つの指標で有意な差が認められた。

【結果】

「広い基底」は参加前より参加後の方が、出現率が有意に低くなった($\chi^2=4.166$ $p<.05$)。幹の根元の著しい広がり、理性による統制の不十分さや、理解力の鈍さを表す(高橋・高橋 2010)とされている。よって回想法への参加は、理性による感情や欲求の統制の統制に影響を及ぼしていると考えられた。

「幹上開」は参加前より参加後の方が、出現率が有意に低くなった($\chi^2=4.083$ $p<.05$)。上部が開放している幹は、自分と周りとの境界があいまいになっている(高橋・高橋 2010)と解釈されている。よって、参加前より参加後の方が自分と周囲の区別がはっきりしている傾向にあると考えられた。

「枝の数」は参加前より参加後の方が、有意に増加している者が多くなった($Z=-1.272$ $p<.05$)。枝は、自分と周囲との精神的交流の円滑さを象徴する(高橋・高橋 2010)とされている。よって、参加前より参加後の方が、精神的エネルギーが高く、円滑に流れ始めていると考えられた。

以上の結果より、軽度アルツハイマー型認知症高齢者に対するグループ回想法は、精神的エネルギーの向上などの心理的效果があるということが量的結果から明らかになった。

(2)【家族の会の質的検討】

介護家族の会は、以下の3つのグループ形態について検討した。

認知症理解および介護情報の提供を目的とした心理教育的グループ

本グループは認知症の病態や心理的特

性など、家族への教育的なプログラムを含み、薬物療法や介護保険の情報などを中心とした進行を目的としたもの
フリートキングを中心としたピアカウンセリング的グループ

特にテーマは設定せず、家族が現在困っている問題について、自由に話し、情報を持つ参加者およびファシリテーターが可能な範囲の情報提供を行うなど、ピアカウンセリングに近い形態を持つグループ進行を目的としたもの。

心理教育的グループとピアカウンセリング的グループの両方

とを折衷した形態

以上の3つの形態について、参加家族にとって望ましいグループ形式をアンケート形式で尋ねた(n=18)

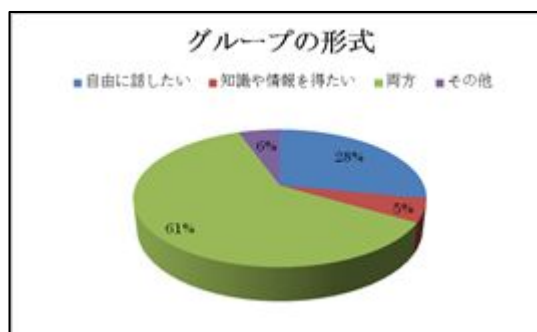


図1 希望する家族の会のグループ形式

最も多かったのは、心理教育的プログラムとピアカウンセリング的グループの折衷形式であった。

自由記述による回答には以下のような記述が認められた。

表2 家族会への感想と要望

他の人からの情報はとても役に立つ
進行具合の同じ程度の方と話したい
男性介護者同志話したい
学問的な知識を得る場合は他に沢山ある
同じ立場で理解しあえてよかった
困っていることを話し、情報を得るのが良
家では悪いことばかり考えてしまう

また、希望する具体的な知識や情報については表3のとおりである。

表3 希望する知識・情報

病院の受診の仕方
薬物療法に関する情報
認知症の将来的な経過と心理特性の理解
金銭管理に関する知識
介護サービス・入所施設について
介護者自身のセルフケア

病院の受診の仕方については、認知症の診断のために受診した認知症疾患医療センター

への今後の受診とこれまで受診してきた近くのかかりつけ医への双方の受診の仕方について戸惑いと混乱があり、薬物の併用なども含め、各グループで開始後早い段階で表明された。また、お金が盗られたという訴えや、銀行での ATM 操作の失敗などから、認知症の症状理解へのニーズや金銭管理についての情報の要望も各グループで認められた。

グループが進むにつれ、介護者が認知症高齢者の介護に振り回され、自分自身へのケア（セルフケア）ができていないことに対する認識も話せるようになり、自分自身の健康と生活についての話や介護保険制度の利用に関する話題もグループ後半、積極的に話された。

認知症の重症度のレベルや介護者としての同じ立場（たとえば娘、嫁、夫、妻）にある他者との交流を望む傾向が強く、家族の会は同様の立場の介護者の貴重な出会いの場であることも明らかとなった。

（3）【ひきこもりや BPSD のみられるアルツハイマー型認知症高齢者とその家族への介護支援プログラムの効果】

認知症介護において、特に介護困難と介護負担を伴うひきこもりや BPSD のみられる事例を対象に、グループ回想法と家族の会を行った。

対象者は 9 名（男性 2 名、女性 7 名、平均年齢 80 歳、平均 MMSE：21 点）で BPSD やデイケア拒否、引きこもりが見られ、介護者が介護負担を感じているもの。効果評価として、患者には参加前後で HDS-R・MMSE、人生満足度として改訂版 PGC モラール・スケールを、家族には Zarit 介護負担尺度、BPSD 評価として DBD を実施した。

【結果】9 名中最終 10 回まで参加できた患者は 4 名であった（継続率 44%）。脱落理由としては、本人拒否が 3 名、通院負担が 2 名である。BPSD を伴う事例は参加の継続も著しく困難であることが明らかとなった。

MMSE および HDS-R は前後で有意な変化は見られなかった。モラールスケールでは回答を得られた 3 名全員に得点の改善が認められた。最終回まで参加継続ができた 4 名は回想法終了後全員がデイケア通所につながった。

以上の結果より、他者との関わりに拒否的であった認知症高齢者が、グループ回想法への継続参加により心理的に安定し、デイケア通所という新たな展開をもたらしたと考えられた。

このように、BPSD を持つ困難事例の場合は会への参加自体が難しいが、継続できた場合はデイケアへの通所が可能になり家族の負担も軽減できることが明らかとなった。

（4）【認知症高齢者と介護家族のネットワーク形成のためのフォローアップ（同窓会）】

グループ回想法と家族の会の終了後は、介護保険手続きを経て、地域のデイケアサービス等を利用するよう会の中で働きかけるが、本人の拒否が強く、再び家庭のみの生活に戻る場合、家族の不安も強く、グループへの 2 度目の継続を希望することになった。本研究では会への継続参加は 20 セッションを上限として、その後は 4 か月に 1 度 同窓会と称した経過のフォローアップグループを行うこととした。

表 4 に同窓会への return 率を示す。

表 4 グループ同窓会（フォローアップ）

年度	回数	平均参加率(return 率)
H24 年度	3 回	86.1%
H25 年度	3 回	88.5%

開始した H24 年度より、参加率は 85% を超えており、極めて高い参加率であった。介護家族の交流の場は地域に少なく、家族の会への参加で得られた参加者間のネットワークが、会の終了後も貴重な役割を果たしていることが明らかとなった。

（5）まとめ：家族並行認知症介護支援プログラムのモデル試案

これらの結果より構築された、家族並行認知症介護支援プログラムの試案を図 2 に示す。

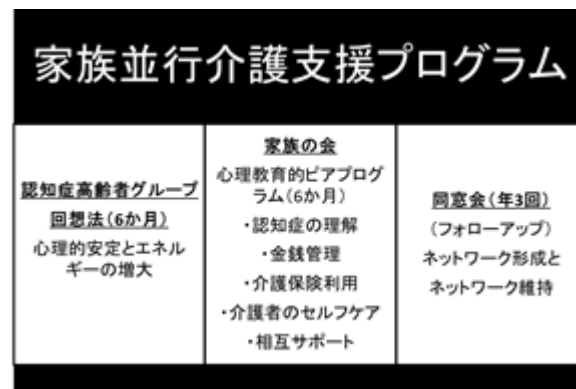


図 2：家族並行認知症介護支援プログラム

認知症高齢者のグループ回想法では、3 か月 10 セッションの実施で心理的な効果が認められたものの、プログラムを終えることに家族の不安が強く、さらにもう 10 セッション、約 6 か月間のサポートが望ましいと思われる。家族の会は、心理教育的ピアプログラムとして、相互のサポートを基盤にしたうえで心理教育的プログラムが、後のネットワーク形成に影響するものと思われた。フォローアップとしての同窓会への高い参加率は、認知症介護が数カ月の短期間で見通しの持てる性質のものではなく、長期に渡って生活の根幹に影響するものであるため、頻度よりも、交流の場の有無の重要性を示している

と思われる。今後予想される認知症高齢者の増加と在宅介護にかかわる家族の介護体制の早期安定のために、今後も家族並行認知症介護支援プログラムの確立にを目指したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

井上麻奈美・篠田美紀：軽度アルツハイマー型認知症高齢者を対象としたグループ回想法の効果に関する研究 パウムテストに現れる自尊感情の変化について-、児童・家族相談所紀要第26号、大阪市立大学大学院生活科学研究科附属児童・家族相談所、pp.35-45。(2012)

〔学会発表〕(計4件)

横手 歩・篠田美紀 他：「大阪市立大学附属病院におけるグループ回想法の試み」、第32回日本認知症学会学術集会、長野県松本文化会館、2013年11月8日～10日

井上麻奈美・篠田美紀 他3名：軽度アルツハイマー型認知症高齢者に対するグループ回想法の効果検討」、日本心理臨床学会第31回大会、愛知学院大学、2012年9月14日～16日

芦田 望・篠田美紀 他3名：「レビー小体型認知症のパウムテスト()-DLBとADのパウムの比較-、日本心理臨床学会第30回秋季大会、福岡国際センター、2011年9月4日

篠田美紀：「高齢者の心理の理解～認知症の治療や地域の介護予防に取り入れられている回想法の紹介～」、和歌山県市町村保健師協議会 和歌山日赤会館、2011年6月2日

〔図書〕(計1件)

1.篠田美紀：【Q4-17：参加者の家族への説明と手続き】、pp.132-133；篠田美紀・沢井智子・中西亜紀、【Q6-1：回想法の効果】、pp.176-177；篠田美紀・中西亜紀、【Q6-13：認知症高齢者のグループ回想法】、pp.200-201；篠田美紀・沢井智子・中西亜紀、『Q&A でわかる回想法ハンドブッカー「よい聴き手」であり続けるために』、中央法規、野村豊子編集代表 編集 語りと回想研究会/回想法・ライフレビュー研究会、2011年8月

6. 研究組織

(1)研究代表者

篠田 美紀 (SHINODA MIKI)

大阪市立大学・大学院生活科学研究科・准教授

研究者番号：10285299